

9. 高気圧酸素療法が奏功した放射線食道潰瘍の2例

中島正一*¹⁾ 大塚 紹*¹⁾ 高取清史*¹⁾
井福武志*¹⁾ 江口寛正*¹⁾ 松井正典*²⁾
瀧 健治*³⁾

(^{*1)} 医) 雪ノ聖母会聖マリア病院臨床工学室
(^{*2)} 同 放射線治療部
(^{*3)} 佐賀医科大学救急医学

【目的】放射線治療後の食道潰瘍は難治性であり、流動食療法や高カロリー輸液を行っても改善がみられない症例が多く、治療に難渋する傾向にある。そこで、放射線治療後の難治性食道潰瘍に対し高気圧酸素療法 (HBOT) を施行し、奏効した2症例を経験したので報告する。

【症例】49歳の男性と60歳の女性で、食道癌の治療の放射線療法が約4カ月間行われた。放射線療法3～4カ月後に食道潰瘍が認められ、その治療として高カロリー療法を行ったが、改善が認められないためにHBOTが検討された。

【方法】第1種高気圧酸素治療装置を使用し、純酸素加圧により2.5絶対気圧 (ATA) 60分間を30～35回施行した。食道潰瘍はHBOT開始より小さくなり、約3カ月目には食道狭窄を伴わずに治癒していることがBa透視検査で確認された。

【考察】HBOTは、加圧で循環の悪い組織に強制的に酸素供給を行い、難治性潰瘍の組織が生体修復機転で非常に良好な状態に治癒されることが知られている。今回、組織障害の強い放射線で発生した難治性食道潰瘍にHBOTを施行して、HBOTが組織修復作用を強力に賦活させたものと考えられる。

【結論】放射線食道潰瘍にHBOTが有効な治療法であると2症例から示唆された。

10. 放射線腸炎に対する高気圧酸素療法

湯佐祚子*¹⁾ 白石祐之*²⁾

(^{*1)} 琉球大学医学部麻酔科学講座
(^{*2)} 同 第一外科学講座

【目的】婦人科領域での悪性腫瘍に対する放射線療法後の副作用として、出血性膀胱炎、腸炎、外陰部及び仙骨部潰瘍などがある。出血性膀胱炎に対する高気圧酸素療法 (HBO) の効果については既に報告したが、今回は腸炎に対するHBOの効果を検討したので報告する。

【対象及び方法】1986年より1997年迄に婦人科又は外科で放射線腸炎又は外陰部壊死と診断されHBOを施行した19例中、HBOを20回以上継続した15例を対象とした。平均で年齢61.8歳、総照射量は68.7Gy、照射より発症及びHBO迄の期間は24.5及び42.5カ月であった。原疾患は全て子宮頸癌で症状は血便、腹痛、イレウス症状で、7症例が出血性膀胱炎又は仙骨部難治性潰瘍を合併していた。HBOは2.0～2.4ATA、90分で5～6回/週で平均80.7回施行した。

【結果】15例中HBOのみで治療したHBO群 (9例) と、人工肛門造設、腸切除、イレウス解除術等の外科的処置を受けたHBO+手術群 (6例) に分けると、HBO群では大部分が結腸～直腸炎で、7例は40～64回のHBOで治癒し、HBO後19～144カ月のfollow upで再発していない。1例は4年間に208回のHBOを施行したが出血による貧血が継続している。HBO+手術群6例では全例が小腸結腸炎でHBOで一過性の症状の改善を見たのは3例、他の症例は出血性膀胱炎、仙骨部難治性潰瘍を合併しており、イレウス症状、下痢、fistula形成等が持続している。放射線腸炎による狭窄、穿孔により手術のみの治療を受けた外科症例39症例では6症例が出血死していたが、HBOを併用していた5症例では出血死はなかった。

【結論】直腸炎～外陰部潰瘍に対してはHBOは有効であるが、全腸の広範囲に及ぶ放射線障害に対してはその効果には限界があると考えられた。